

第1室

(5) 9:30 ~ 10:00 (6) 10:10 ~ 10:40
 (7) 10:50 ~ 11:20 (8) 11:30 ~ 12:00

第1室 (5)

中学校英語科の表現欲求時指導法の開発と実証

—表現したい欲求を最大限に活用する明示的指導法—

吉田 龍弘（焼津市立大井川中学校）・白畑 知彦（静岡大学）

本研究の目的は「話すこと」及び「書くこと」の領域において、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することができる生徒の育成を目指し、Gass（1997）の認知プロセスとSwain（1998, 2005）のアウトプット仮説における「穴への気づき」を手掛かりに筆者が開発した「表現欲求時指導法」（Explicit instruction at the point of communication need）の効果を実証することである。

「表現欲求」は「自分が表現したいことが第二言語でうまく言えない」という「穴への気づき」から「どのようにそれを表現すればいいのか知りたい」という一連の意識と定義した。表現欲求時指導法の概要は、「目的や場面・状況等を設定したタスク活動を通して、教師が学ばせたい言語材料に関する表現欲求を学習者に対して意図的に発生させ、その表現欲求を満たす言語材料について明示的に指導する授業法」である。

静岡県内の公立A中学校の2年生に対して、学習者全員が未習段階である比較表現の指導を、表現欲求時指導法で展開する実践群と、PPP授業で展開する統制群とで比較検証した。結果、表現欲求時指導法で展開した実践群のテストの得点差が下位群で有意に高く、学力の底上げをする形となった。さらに、「話すこと」の活用の中で、スムーズに自分の考えや気持ちなどを適切に表現できる生徒が多かった。また、表現欲求が発生した文法項目が「書くこと」のテストの解答に多く記載されたことから、生徒の表現欲求により認知プロセスが強化され、比較表現に関する知識が印象深くインプットされたと考えられる。このことから、表現欲求時指導法は目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することができる生徒の育成に適した指導法と言える。

第1室 (6)

Task-Based Language Teaching using Online chat and Forum Discussion

城山 友孝（英国エクセター大学大学院）

Task-Based Language Teaching (TBLT) using Computer-Mediated Communication (CMC) is popular in improving learners' communicative ability. There are many advantages of this approach including enhancing students' autonomy, self-learning etc (Lee, 2016). However, there

are limited studies in this field (Kitade, 2006; Stockwell, 2010), so it needs further investigation. The current study aims to explore how Computer-Mediated Communication can be utilized effectively in the task-based language teaching framework. In order to do this, it investigates lexical density, syntactic complexity and spelling accuracy in task-based synchronous and asynchronous computer-mediated communication (SCMC and APMC) . Eighteen advanced learners of English participated in this study and worked on decision-making tasks in groups of three, both in SCMC (online chat) and APMC (forum posting) modes. A quantitative approach is adopted in this study. In order to investigate lexical density, type-token ratio is calculated by using Text inspector. In order to investigate syntactic complexity, two measures (mean length of clause, and mean length of T-unit), are calculated by the Syntactic Complexity Analyzer. Then, a paired-samples t-test is carried out to investigate whether there is any difference between the modes. The findings will be presented during the CELES conference.

第1室(7)

高等専門学校における再話を取り入れた英語指導の実践

山田 慶太(豊田工業高等専門学校)

再話 (retelling) は、先行研究において学習者が再話を前提として文章を読む場合、文章への理解度が高まる可能性 (Kai, 2008)、また、文章を読んだ後に再話に取り組む学習者がその認知活動の中で意味と形式の両方に注意を向けることで言語発達を促進させている可能性 (Yoshimura, 2006) が示唆されており、学習者の言語学習において有益な言語活動であると考えられる。また、再話は、読んだり、聞いたりした文章を学習者自身の言葉で他者に伝えるという活動形式が教室指導に導入しやすいことから、近年、中高の英語指導において広く取り入れられている。

筆者は高等専門学校2年生(高校2年生に相当)を対象とする英語講読Ⅱ(高校のコミュニケーション英語に相当。週1回90分授業で前後期各15回)の授業において、再話を毎授業で取り組む継続的な言語活動として位置付けた授業実践を行った。実践の目的は、先行研究で明らかになった言語学習における再話の効果に期待しつつ、教科書題材の内容に深く踏み込むことを目指す授業の実現に向けた再話の可能性を見出すことである。

本実践では検定教科書である New Flag Ⅱ (増進堂, 2016) 掲載の “Rise Again, Motala!” を扱った。この題材は地雷被害にあった Motala (メスの象) と彼女を救おうとする人々との交流を通して、今なお人々を苦しめる地雷の存在を知り、平和の重要性を再認識させる内容となっている。

授業は、①導入活動、②個人読みによる概要・細部情報把握、③他の学生との情報の共有、④内容理解の確認、⑤再話活動(音読、キーワード選び、準備、ペアでの再話、振り返りと自身の再話の書き起こし)という流れで行った。また、単元の終末に、題材に関連した発展的な内容の文章 (“The world without landmines”) を用いたジグソー再話を実践した。

発表においては、上記の授業の具体的な方法及び学生の取り組みの様子を中心に説明し、筆者による観察記録、学生による振り返りの記述内容を基に、本実践の成果と課題を分析し、議論し、

今後の展望について述べる。

第1室(8)

中学生を対象とした Story Retelling Writing Test (SRWT) の利用可能性の検証

久保 佑輔（筑波大学大学院）

本研究は、平井（2015）が提唱した技能統合タスクである Story Retelling Writing Test (SRWT) の中学生への利用可能性を検証する。そして、SRWT を実施する上での留意点やフィードバックについての示唆を得ることを目的とする。

現実世界でのコミュニケーションは、読んだ内容について、自身の意見をまとめたり要約して他者に伝えたりするなど、複数の技能を統合して行われる。そのため、近年の英語教育では、技能統合的な言語活動を行う必要性が指摘されている（文部科学省, 2017）。このような流れを受けて、Hirai & Koizumi (2008) は、技能統合タスクである Story Retelling Test (SRT) を開発した。SRT はインプットモードとアウトプットモードの組み合わせによって、タスクの性質や難易度などを調節することが可能である。現在までに大学生を対象として、アウトプットモードをスピーキングとしたタスクを行い、タスクや使用する評価尺度の妥当性や信頼性の検証が行なわれている（e.g., Koizumi & Hirai, 2012）。しかし、これまでの対象者は全て大学生であり、アウトプットモードをライティングとする SRWT の検証は行われていない。そこで本研究では、中学生を対象に、SRWT を実施し、SRWT が中学生にとって妥当な難易度であるかの検証を行う。

タスクで使用するテキストは授業で一度使用した教科書本文を改編したものである。SWST 実施時に内容確認問題を行ったところ正答率は87.2%であったため、テキストレベルは適切であった。中学生が産出した英文を、平井（2015）を基に作成した5つの評価項目から成る評価規準を用いて採点を行った。その結果、SRWT は中学生にも利用可能であることが明らかになった。本発表ではこの結果を基に、中学生に SRWT を実施する際の留意点や成果について考察を行う。